

# 東京・下宅部遺跡<sup>しもやけべ</sup>

- 1 所在地 東京都東村山市多摩湖町四丁目
- 2 調査期間 二〇〇一年度調査 二〇〇一年(平13) 四月～二〇〇二年三月

- 3 発掘機関 東村山市遺跡調査会
- 4 発掘担当者 千葉敏朗
- 5 遺跡の種類 低湿性遺跡・祭祀遺跡
- 6 遺跡の年代 縄文時代後期～中世
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要



(青 梅)

下宅部遺跡は、武蔵野台地のほぼ中央部に島のように存在する狭山丘陵の東端の谷間に位置する。都営住宅の建て替えに伴って、一九九六年八月から二〇〇三年三月まで本調査が行なわれた。縄文時代後期から中世にかけての複合遺跡で、縄文時代後期の水場遺構、八・九世紀の池や谷での水場祭祀遺構が

主体となる。

これまで中世に関係する遺構・遺物は多くはなく、一三世紀を主とする若干の舶載陶磁器片がまばらに出土しているだけであった。そうした中、二〇〇一年度の調査で、丘陵上から石敷き遺構が発見され、そこから板碑が、また遺構直下の自然流路から木簡が出土した。

石敷き遺構は、北側丘陵部からの湧水が刻んだ小規模な谷の東岸の肩付近で、一〇m幅くらいの範囲に川原石を乱雑に敷き詰めた状態で検出した。谷の出口と本流側では傾斜面にも石敷きが存在し、一定の角度が保たれており、護岸の性格も有するものと考えられる。板碑は全部で数十点あるが全て断片であり、最大のもので縦五七cm幅三五cmに過ぎない。これらは石敷き遺構内の直径約一mの浅い窪みに乱雑に投げ込まれ、一番大きな破片で蓋をされた状態で出土した。破壊・廃棄された状態ではあるが、もともとその場に設置されていたものである可能性も検討している。種子・陰刻をもつものには、阿弥陀一尊、阿弥陀三尊、「月廿八日/明珠」の三点がある。

木簡は本流側の傾斜面を下った、自然流路内から一点出土した。岸辺の黒色のシルト層から出土しており、多少の動きはあるにしても、原位置を保っているものと考えられる。

東村山市周辺は武蔵七党の本拠地の一つに想定されているが、具

体的な中世遺構は発見されておらず、今回の発見は周辺の中世史を研究するための新資料となる。

# 8 木簡の釈文・内容

(1) 「<sup>(キリク)</sup>南無阿弥陀<sup>(仏カ)</sup>□□年

第六日敬白

(197)×26×5 061

四片に分離しているが、出土時には破片の位置関係が保たれており、埋没途中で折れたものである。ほぼ完形だが、下端に少々欠損がある。中央部の欠損は調査中のもの。板目材で、上端部左右に各二カ所の切り込みをもち、上端部を黒く塗る。「年」の上は「年号+数字」であると予想される。「第」の上の字は「月」の可能性があるが判読不能。

なお、釈読にあたっては、奈良文化財研究所の渡辺晃宏氏、馬場基氏、明治大学の吉村武彦氏ほかのご教示を得た。

(千葉敏朗)



木簡学会二〇周年記念図録『日本古代木簡集成』の刊行

木簡学会では、会創立二〇周年を記念して木簡図録『日本古代木簡集成』を刊行した。これは、先に一〇周年を記念して刊行した『日本古代木簡選』(一九九〇年一月、岩波書店刊)の続編にあたるもので、これ以後一九九九年度までに全国で出土した古代の木簡を中心に、各発掘調査担当機関のご協力を得て、のべ一〇七の遺跡の木簡計五一〇点を鮮明な図版として紹介する。

この間、長屋王家木簡・二条大路木簡の発見など、木簡の出土点数は飛躍的に増大した。それとともに、木簡出土の量と質の地方へのひろがりにはまことに目を見張るものがある。今回はこうした状況を受けて内容別の編集方針をとり、図版、釈文、解説の三本立てとした。また、木簡出土遺跡・遺構解説を付し、検索の便を図った。解説の執筆は、佐藤宗諄・寺崎保広・山中章・吉川真司・増渕徹・山口英男・渡辺晃宏・館野和己・鈴木景二・佐藤信・本郷真紹・和田萃・東野治之・古尾谷知浩の各氏(執筆順)の分担による。また、印刷は岡村印刷工業株式会社が行った。

B四版 巻頭カラー図版二プレート、モノクロ図版一二四プレート、解説ほか一四二頁 (財)東京大学出版会、二〇〇三年五月刊 定価二〇〇〇円(税別)